



世代間交流

亀井 智子

聖路加国際大学看護学部, 研究センターPCC実践開発研究部



日本地域看護学会誌, 18(1): 118-121, 2015

I. 世代間交流研究とその背景

戦後の経済成長を背景に、わが国の家族形態、家族への価値観は大きく変化してきた¹⁾。近年では、都市部への人口集中や地方の過疎化、また少子化が進展する一方、祖父母世代との同居や子育てに親以外の地域住民が参加することが少なくなり、家族や地域の子育て機能は低下している¹⁾。また、高層住宅の普及など居住形態の変化、地域行事の減少など、大都市では生活環境に起因して、高齢者世代と子ども世代の地域における日常的な自然な交流が減少し、おのおの世代の孤立やコミュニティを形成する人々の相互の結びつきの希薄化が指摘されている²⁻⁴⁾。

世代間交流とは「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」⁵⁾と定義される。アメリカでは、1960年代から高齢者と成年の世代間交流プログラムが発展し、問題をもつ青年の立ち直りに高齢者による支援が生かされ⁶⁾、またわが国では幼稚園・保育園と高齢者のデイサービス・特別養護老人ホームの一体的取り組み⁷⁾、高齢者による小学校での本の読み聞かせによる生きがいづくり⁸⁾、地域における交流プログラム⁹⁾、さらに、阪神淡路大震災を契機として、異世代の連携をいっそう強めることの必要性が認識されるなど、福祉、教育、保健、医療など多様な分野において近年、世代間交流が注目されるようになった。

高齢者と子どもの世代間交流は、時間や場を共にするなかで、互恵的ニーズに基づいた高齢者から子どもへの

世代継承性や地域文化等の伝承、また、子ども世代にとってはさまざまなものを高齢者から得るプロセスである。交流の成果には、高齢者にとっては心身のヘルスプロモーションや生きがいづくり、子どもにとっては高齢者理解の深まり、地域社会にとってはソーシャルキャピタルの醸成などが挙げられる⁸⁻¹⁰⁾。しかし、世代間に生じる相互交流のプロセスや、交流の量そのものを評価できる尺度は少ない。世代間交流プログラムが各地に広がっている現在、そのプロセスやアウトカム評価を行い、継続的にプログラムの質の向上に生かしていくことは重要であると考えられる。

II. 世代間交流を測る指標

これまで、世代間交流プログラムによる成果の測定尺度としては、高齢者のうつや生活の質、主観的健康度、情緒的イメージ、社会的ネットワーク、子どもに対しては、高齢者への態度、高齢者のイメージなどを各世代別々に評価する方法がほとんどであった¹¹⁾。世代間交流そのものを測定する物さしが見当たらなかったことに起因して、各世代別々に評価指標を決めて、測定してきたと考えられる。しかし、最近になって、世代間交流中の高齢者と子どもの行動、言動、表情、態度などに着目して主催者など第三者が世代間交流の様子を観察・評価するための尺度が開発されるようになった。わが国で開発された世代間交流を測る尺度には、現在のところ、次の3つがある。

1. 日本版世代間交流行動尺度

この尺度は、アメリカの世代間交流研究者である Newman and Onawola¹²⁾が開発した「高齢者と児童の世代間交流の行動尺度 (ECIA)」また、その修正版である「修正版 ECIA」¹³⁾を基に、わが国で使用できる尺度として開発されたものが日本版世代間交流行動尺度¹⁴⁾である。高齢者が小学校で絵本の読み聞かせボランティア活動を行う「りぷりんと (REPRINTS)」の活動⁸⁾をベースにして開発されていることが特徴である。この尺度では、小学校の教室に読み聞かせのために訪問している高齢者全体と小学生児童間のコミュニケーションと行動を観察して評価するもので、世代間交流を15秒1単位で全5分(20単位)で観察し、10秒間に観察された各世代の行動や会話を記録用紙の1観察単位のマスに○を記入する方法をとっている。尺度の構成は「会話」「視線・表情」の2項目から成り、会話については高齢者8項目(情報、コメント、投掛、応答、称賛・励まし、注意・修正、ユーモア・笑い、沈黙・無視)、子ども5項目(応答、自発、ユーモア・笑い、ふざけ・おしゃべり、沈黙・無視)が観察項目となっている。視線・表情では、高齢者、児童とも6項目挙げられ、顔の向き(同世代、異世代、その他物や本など)、および表情(ポジティブ、ネガティブ、ニュートラル)を観察項目に挙げている。尺度の信頼性は3人の観察者間一致率(カッパ係数)により評価されており、0.64~0.90と報告されている¹⁴⁾。この尺度では、間接(ビデオ録画)観察を推奨している。

2. 地域世代間交流観察スケール (Community Intergenerational Observation Scale for Elders and Children: CIOS-E, CIOS-C)

CIOS-E, CIOS-Cは、地域において開催される高齢者と子どもの世代間交流プログラムにおける両者の相互作用を観察する尺度として、17か所の地域で実施されている多様な世代間交流プログラムをベースに開発された観察尺度である¹⁵⁾。高齢者側からみた子どもとの相互作用の評価である CIOS-Eは「包容」「伝承」「育成」の3因子構造計7項目、子ども側からみた高齢者との相互作用の評価である CIOS-Cは「継承」「尊重」の2因子構造計7項目の尺度で構成される。多母集団同時分析により、交差妥当性が検討されており、異なるプログラムにおける測定不変性が確認され、信頼性は Cronbach α =0.79~0.81、観察者間一致率(カッパ係数)0.73と報告されている¹⁵⁾。

CIOS-E, CIOS-Cの使用方法は、高齢者個人、子ども個人と交流する相手世代との交流場面を観察し、その行動や様子が一貫して頻繁にみられる場合2点、その行動や様子が一度でもみられる場合1点、交流行動や交流の様子がまったくみられない場合0点として採点するものである。

3. 聖路加式世代間交流観察 (St. Luke's Intergenerational Exchanges and Relations Observation (SIERO) インベントリー)

SIERO インベントリーは、地域で毎週1回集う高齢者と小学生の継続的な世代間交流プログラムをフィールドとして開発された観察尺度である。プログラム創生期の2年間にわたる80回の世代間交流プログラムで生じた交流の様相を、エスノグラフィー¹⁶⁾の手法を用いて参加観察・記録し、その分析から、「教え・教え合う」「感情を分かち合う」など世代間交流14カテゴリーを抽出している。その各カテゴリーに質問文を置いて暫定版 SIERO インベントリーを作成したのち、それを用いて、1年間の前向き調査により計42回の世代間交流プログラムに参加したのべ637人分(高齢者469人分、小学生168人分)の観察記録の分析から、4因子構造(異世代と歩調を合わせる、世代継承性、異世代との対話、交流活動を楽しむ)17項目の本尺度が開発された。内的整合性、信頼性、妥当性の検討が行われ、Cronbach α =0.57~0.78と報告され、確認的因子分析、基準関連妥当性、弁別妥当性により信頼性、妥当性が確保された尺度である¹⁷⁾。

SIERO インベントリーは地域における高齢者世代と子ども世代の各個人の交流の様子、言動、態度、行動、表情などをプログラムの主催者等が観察し、各項目が1回でも観察された場合○をつけ1点とする方法をとっている。本尺度は、高齢者、子どもとも、同一の尺度である。

Ⅲ. 世代間交流観察尺度を活用できる地域看護実践例

筆者らは、看護系大学を拠点とした People-Centered Careを創生するため、都市部地域に在住する高齢者、および小中学生を対象とした多世代交流型デイプログラムを学内に設け、週1回継続的に開催している。世代間交流の量を参加高齢者の特性別に評価するために、SIERO インベントリーを用いて、プログラム中の世代

間交流を観察・分析した。その背景には、参加高齢者には、認知症をもつ者、何らかの身体不調がある虚弱な者、心身の健康に心配のない者が、また、子どもでは、学習障害をもつ児童など、参加者が多様であることが挙げられる。そのため、参加者の特性に応じた、世代間交流支援を検討する必要性を痛感していた。高齢者を認知症高齢者、虚弱高齢者、一般高齢者に便宜的に区分して、SIERO インベントリーの得点を比較した。その結果、都市部の看護系大学を拠点とした世代間交流プログラムにおいては、「一般(自立)高齢者」に交流得点が高く、虚弱高齢者と認知症高齢者はほぼ同程度であった。一般高齢者は互いにあいさつをして子どもを迎え入れ、子どもへの気配りがあり、子どもに話かけ、話を聞き、同じ話題で会話をしていた。一方、虚弱高齢者は、子どもからの話を聞き、同じ作業・活動に集中してプログラムを楽しんでいた。認知症高齢者では、子どもの話を聞いているが、話かけることは少ない。子どもをみると笑顔になるが、ほめることは少ないなど、虚弱・認知症高齢者では小学生との「会話」によるコミュニケーションが少なく、「話を聞いている」傾向にあることが示された。一方、「プログラムを楽しむ」ことには、認知症、虚弱、一般(自立)高齢者、小学生による差異は認めなかった。世代継承性では、高齢者よりも、小学生に「教え・教えられる」「異世代のやり方をまねる」が高い傾向にある特徴があった¹⁸⁾。

これらの交流評価から、都市部で行う小学生と高齢者との世代間交流プログラムの留意点として、高齢者の認知機能や脆弱性に応じた、また子どもが学べるような世代間交流を促す看護支援、とりわけ異世代間の“コミュニケーションをつなぐ”ための介入を行うことの重要性が示唆され、運営する教員スタッフでこれらに配慮した支援を行っているところである。再度SIERO インベントリーを用いて評価することで、支援の成果を検討できる。

以上のように、尺度による評価を取り入れ、対象者の個別特性に応じた世代間交流を実践することは、プログラムの質の改善につながると同時に、すべての世代の人が互いにケアし合える地域づくり、すなわちソーシャルキャピタルの醸成につながると考える。

【文献】

- 1) 内閣府：平成13年度国民生活白書。 <http://www.caa.go.jp/seikatsu/2002/0326wp-seikatsu-s.pdf> (2015年3月6日)。
- 2) 内閣府：平成19年版国民生活白書。 http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h19/10_pdf/01_honpen/index.html (2015年3月6日)。
- 3) 国土交通省：平成17年度 国土交通白書。 <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h17/index.html> (2015年3月6日)。
- 4) 内閣府：平成25年版 子ども・若者白書(全体版)。 <http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h25honpen/index.html> (2015年3月6日)。
- 5) Newman S, Ward R, Smith B, et al. : Intergenerational programs : past, present, and future. 55-80, Taylor & Francis, Washington DC, 1997.
- 6) Larkin E, Newman S : Intergenerational Studies : A multi-disciplinary field. *Journal of Gerontological Social Work*, 28 (1/2) : 5-16, 1997.
- 7) 厚生労働省：宅幼老所の取組。 http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureiisha/other/dl/other-04.pdf (2015年3月6日)。
- 8) 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀・ほか：都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム：“REPRINTS”の1年間の歩みと短期的効果。日本公衆衛生雑誌, 53(9) : 702-714, 2006.
- 9) Kamei T, Itoi W, Kajii F, et al. : Six month outcomes of an innovative weekly intergenerational day program with older adults and school-aged children in a Japanese urban community. *Japan Journal of Nursing Science*, 8 (1) : 95-107, 2011.
- 10) Boström AK : Social capital in intergenerational meetings in compulsory schools in Sweden. *Journal of Intergenerational Relationships*, 7(4) : 425-441, 2009.
- 11) 糸井和佳・亀井智子・田高悦子・ほか：地域における高齢者と子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果；文献レビュー。日本地域看護学会誌, 15(1) : 33-44, 2012.
- 12) Newman S, Onawola R : The ECIA: Elder/Child interaction analysis. generationstogether. University of Pittsburgh Center for Social and Urban Research, Pittsburgh PA, Unpublished Manuscript, 1989.
- 13) Newman S, Morris GA, Streetman H : Elder-child interaction analysis ; An observation instrument for classrooms involving older adults as mentors, tutors, or resource persons. *Child & Youth Services*, 20 (1/2) : 129-145, 1999.
- 14) 村山 陽・藤原佳典・安永正史・ほか：日本版世代間交流行動尺度の作成。日本世代間交流学会誌, 1(1) : 27-37, 2011.
- 15) 糸井和佳・亀井智子・田高悦子・ほか：地域における高齢者と子どもの世代間交流観察スケールの開発：CIOS-E, CIOS-Cの信頼性と妥当性の検討。日本地域看護学会誌, 17(3) : 1-9, 2015.

- 16) Roper JM, Shapira J : Ethnography in nursing research. Sage Publications, Thousand Oaks, CA, 2000.
- 17) 亀井智子・山本由子・梶井文子 : 聖路加式世代間交流観察 (SIERO) インベントリーの開発と信頼性・妥当性の検討. 聖路加看護学会誌, 17 (1) : 9-18, 2013.
- 18) 亀井智子・山本由子・梶井文子・ほか : 都市部における世代間交流プログラムの高齢者と子どもの交流評価第2報 : 参加高齢者の特性格別交流評価. 第19回日本在宅ケア学会学術集会講演集, 70, 2014.